

筑波山門前町の立地生態

佐々木 博

- I はじめ
- II 筑波門前町の形成
 - II-1. 筑波山神社の沿革
 - II-2. 参詣道の発達
 - II-3. 門前町の立地移動
- III 筑波山門前町の生態
 - III-1. 産業構造
 - III-2. 土地利用・農業
 - III-3. 職業の地域的構成
 - III-4. 居住年数・社会的流動
 - III-5. 住民意識
 - (1) 子供の教育に対する意識
 - (2) 余暇の過ごし方
 - (3) しきたり意識
 - (4) 生活程度の意識
 - (5) 筑波の将来に対する意識
 - (6) 宗教
 - (7) 買物
- IV まとめ

I はじめに

門前町はその名のとおり、神社・仏閣の門前に発達した町で、参詣者を対象とした土産物店・飲食店・旅館・ホテル・娯楽施設や、場合によっては宿坊・御師の家などが門前の道路に沿って並んでいる集落である。田中啓爾(1933)¹⁾は「門前町(信仰集落)としての成田町」の中で、門前町の定義には全く触れないまま「門前町に見る旅館・料理屋・土産物店の種類の内、この成田町は門前に近づくにつれ旅館が多い。これは講と称する団体の参拝者が多数を占め、それ等が講制度により参拝し宿泊する習慣を持っていたからである。講の数は1万余に及び主なる旅館はそれ等の講の特約旅館として確実なる存在を維持して来たのである。善光寺の門前町長野市に於ては仁王門外の大門町の東方の表通一列・裏通一列・仁王門と山門間の元善町の東西裏通二列に軒を並べる坊及寺は各講の信者を宿泊させることが財源の一と数へられ、相互の講勢力圏を侵略しない規約になっているが、この成田町はそれほどの末寺の坊及寺はない。ただ参籠者の寄宿舍(水垢離場に隣る)のみ存し、一般宿泊者はすべて門前の旅館に一任してある。」と述べている。

浅香幸雄(1959・1963・1967)²⁾の木曾御岳・富士山北口・大山などの一連の研究では信仰登山集落という名を用いており、岩鼻通明(1981)³⁾は戸隠神社を山岳宗教集落としている。呼称は異なってもその集落の立地機能は同じで、一般的には門前町と称し、和英辞典にもcathedral (temple) townとして出ている。門前の繁華の度合は、筑波町館の^{こかげ}蚕影神社や、福島県西会津(野沢)町の大山祇神社の門前のように、たった一軒の飲食店兼土産物屋兼旅館といったものから、成田・琴平・長野や、はては静岡県富士宮市の大石寺のような大規模なものまである。市街を形成するほどに成長してないものを、門前集落と呼ぶこともある。神社は鳥居だから鳥居前町などと区別する人もいるが、末梢的なことで上級概念としては門前町でよい。

ヨーロッパには日本風の細長い門前町は少ないが、フランス＝ブルターニュの Le Mont St. Michel の丘へ登る通りや、バチカン市国の San Pietro 寺院正面の通り、アテネのアクロポリスへの登り口などに若干見られる。多くは面的に発達した市街を形成しているものが多い。フランス＝ガスコニュの Lourdes、スペイン＝ガリシアの Santiago de Compostela（西のエレサレムと呼ばれている聖地）、西ドイツ＝オーバーフランケンの Bamberg やヘッセンの Fulda などがある。これら典型的な門前町以外にも、ヨーロッパの都市の多くは教会や修道院から発達したものが多く、有名な教会前広場には、門前が発達している。これらは市街地の中の門前町という点では浅草・門前仲町などと似ており、代表例としては、フランスのパリ・ランス・アミアン・シャルトル・ラオン・ルアン、ベルギーのトゥールネイ、ドイツのヴェルツブルク・マインツ・ケルン・ヴォルムスなどがある。蚕影神社級の最下位のプリミティブな門前集落としては、巡礼地的要素をもつアイフェル山地のマリア＝ラーハー修道院、オーバーフランケンの Vierzehnheilige やオーバーイエレンの Wies 教会などがある。

藤本利治(1970)⁴⁾は宗教的集落のうち、「信仰の対象が全国的に拡大され特色ある景観をなすに至っているもの」を、いわゆる門前町であると定義しているが、理解に苦しむ定義である。本来日常用語としての門前町とは冒頭に述べたようなもので、集落の発生と機能を重視して集落を典型的に呼ぶのに便利な言葉である。

筑波山門前町に大字筑波を当てはめると世帯数252(1980)、人口905人であるが、宿泊施設はユースホステルを含めて6、土産物店は27と小規模な門前町である。

本研究はこの小規模な門前町の立地生態、簡単にいえば、この門前町は何で生計の資を得ているか、また門前町を構成する各家は経済的にどのように結び付いているかを分析することにある。

II 筑波山門前町の形成

II-1. 筑波山神社の沿革

山崎直方・佐藤伝蔵(1903)共編『大日本地誌巻一』に、「筑波町は北条より一里筑波山の中腹にあり、阪に拠て市街を為す・夏季登山の客多きを以て頗る繁栄す。街の上端に筑波神社及び中禪寺の仏閣あり。共に建築丹塗を施して最も壯麗なり。……東の山峽に白滝の勝あり。老樹茂りて幽邃の致あり、水清くして気魄を洗ふに足るべし。旅館其の間に介在して夏季避暑の客最も多し。」とある。明治30年代には筑波山斜面に市街が形成されていたことが分る。

明治天皇が茨城県行幸の折、叡覧に供するものを筑波山乃社務所を調査していた折、杉山友章著の筑波誌と題する一書が出てきた。明治41年(1908)に出版され、1975年筑波山名中社版として復刻された。筑波誌に「西の峯には筑波男神を祭り、東の峯には筑波女神を祭る、延喜式に筑波山神社二座とある是なり、拝殿は麓の鳥居より六町程上りたる処にあり攝社四社、安座常神社、小原木神社、稲村神社、とす都て東峯の各所にあり、本社攝社とも創立年度詳かならずと雖ども、名山大川には早く神祇の創祀ありたるは、古書に徴して知るべきなり、……南方の小丘に、山口という所あり、往昔は登山の者此所より登りし故此名ありと、山口の北の方六所という所に六所神社あり、此神社を六所といふは筑波神社二座と攝社四社を併せて六所と称したるものにして、昔時は男神女神の御座替りの

宮なりしといひ伝ふ、……延暦元年に至り、僧徳一当山に錫を止め、山上の神殿を改築して兩部習合の神社とし、筑波兩大権現の名称を付し、更に山腹に伽藍を創設し千手観音を安置し知足院と称し中禪寺と号したり、而して嵯峨天皇の朝、官社に例せられ、……慶長七年十一月徳川家より旧封を改め五百石の朱印を賜はり、祈願所と定められたるにより、社僧宥俊を中興の初祖とせり、……第三世栄増の時、徳川家光深く筑波神社を崇敬し、寛永十年工を起して山上兩本殿攝社四社を建築し、更に徳一の開基に係る、堂宇の位置を交換し、新たに本堂及五重塔鐘楼々門等輪奐の美を極めたる建築を為し、此時、山上兩本殿は、二十五年毎に改造の制を立てられたり、……明治六年十月県社に列す、」とある（写真1・10・11）。

徳一大師が延暦元年（782）に建てた知足院中禪寺は、今日の東山とも、今日の筑波神社拜殿付近ともいわれている。筑波誌の記述では「徳一の開基に係る、堂宇の位置を交換し」とあるので、中禪寺が東山にあったらしいことをにおわせている。家光は寛永10年（1633）現在の筑波神社の場所を整地し、石垣を築き、社殿を新築し、神社の南に今日の六町通りの門前町を建設した（写真8・9）。大工・石工・仏師・屋根師・塗物師など一流の職人を江戸から連れてき、材木は木曾の檜を霞ヶ浦の土浦港から陸路馬背によって運ばせた。社殿建築用材を運搬するために真直ぐな六丁通りを建設し、両側に大工・石工・近在の村人らを住まわせて、土地と家を無償で与えた。これらの中から宿屋・土産物屋・遊女屋などが生まれ、今日でも鳥居・石垣・石段・側溝などに当時の繁栄ぶりを残象として伝えている。今日の筑波山神社かいわいには、日輪院・月輪院・華蔵院・大慈院など30数軒の僧坊が建てられた。中禪寺は坂東38カ所の25番礼所であったため、白装束の巡礼の列が絶えなかったという。

II-2. 参詣道の発達

古来筑波山に登山あるいは参詣する道には次の六つがあった（Fig 1）。

- ①府中道 常陸国府のあった石岡から、八郷町柿岡・小幡・十三塚を経て東山に至る。あるいは十三塚から山腹の弁慶七戻の奇岩を経て女体山に至る。
- ②山根道 北条東方の山口から平沢・館・六所を経て、風返峠で府中道と合流する。徳一大師の頃に開かれたといわれる古い参詣道。
- ③六丁通り 北条から神郡を過ぎ、臼井の逆川にかかる迎來橋を渡り、瓜先上りの県道を進むと筑波6丁目の大鳥居に至る（写真2・3・4）。家光の開いた新道で、1918（大正7）年筑波線（今日の関東鉄道筑波線）開通までは、江戸からの主要参詣道であった。
- ④西街道 水海道や古河方面から来る道で、筑波山西麓の上下大鳥・国松・沼田を経て筑波に達する。
- ⑤椎尾道 下館方面から筑波山西麓椎尾山を経て直ちに男体山に達する。椎尾山には宿屋が数軒あったといわれ、葉王院が旧時の小さな宿場の名残りを止めている。
- ⑥真壁道 真壁方面から田村・伊佐々を過ぎ、筑波山北麓羽鳥より覚えない樵路をたどって男体山に達す。山頂部の領地に関して、真壁町がその領域権を主張して、（1957年提訴、一審の水戸地裁で勝訴した。しかし筑波町の東京高裁への控訴判決が1982年6月30日下され、25年目にして筑波町への逆転勝訴となり、「御幸ヶ原を含む山頂部は筑波山神社境内」と認定された。

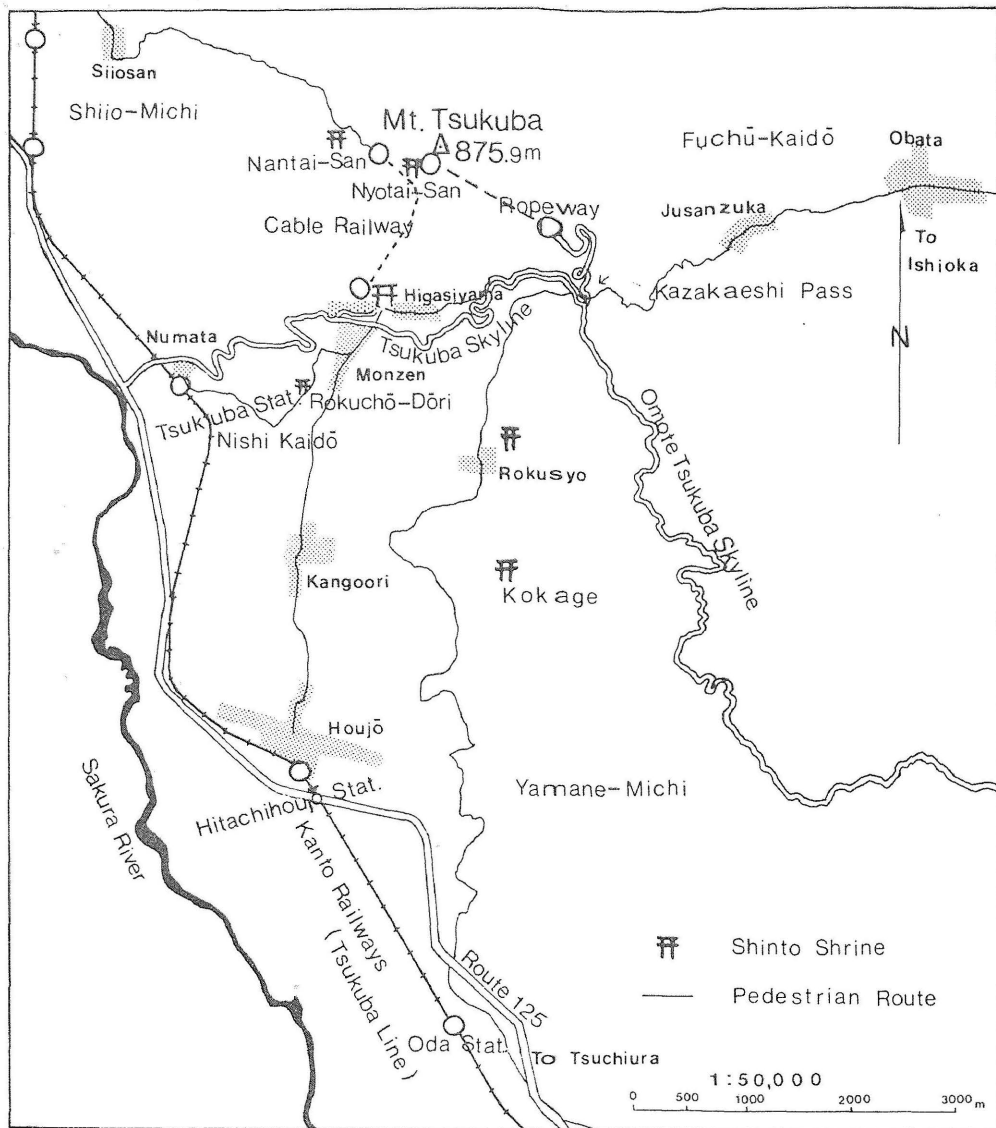


Fig. 1. 筑波山参詣道
Roads to Mt. Tsukuba

Ⅱ-3. 門前町の立地移動

原初的門前町は六つの参詣登山道の基地であった各集落にみられたはずである。江戸の長期安定政情のもとに伊勢詣り、善光寺詣り、琴平詣りと同様に、筑波山に見える関東各地⁵⁾からの筑波詣では盛んになった。神社参拝後の精進落しとしての筑波女郎衆のもてなしの魅力もあって若者に人気があり、最盛期には11軒の遊女屋が六丁通りの1・2・3丁目にひしめいていた。

嘉永4年(1851)12月27日の西山の橋のたもとの家での餅つきの火から大火となった、いわゆる「橋本火事」で門前町は全焼した。1872年(明治5)8月、廃仏棄釈運動によって知足院中禅寺の仏

像・仏画・仏具が寺の境内へ持ち出されて焼かれ、さらに大御堂・三重塔・十一面観音堂などが打ちこわされた。同年の人身売買禁止令もあって遊女屋が廃業に追い込まれた。

1879年（明治12）、2年前の東京での第1回内国勸業博覧会をまわって、大御堂跡の広場で全国博覧会が開かれた。アメリカ製の時計・油絵・自転車・農器具・乳牛や、国内各地の産物も出品され、芝居小屋や相撲場も設けられ、毎日数千人の客があり六丁通りは早朝から日暮れまで人通りが絶えなかったという。一時的な繁栄はあっても、全体としては江戸時代に比べて門前町は衰えていった。

1889年（明治22）水戸鉄道水戸線、1896年（明治29）日本鉄道会社海岸線（今日の常磐線）上野—水戸間が開通し、東京や水戸・栃木県から筑波山へ容易に来れるようになった。1904年（明治37）のパンフレット⁷⁾「筑波山」には、「東京より来るものは、日本鉄道の海岸線により、土浦駅に下車し、腕車（人力車）を走らすこと約4里半（18km）にして、筑波山のふもと臼井に達す。その賃金五十銭内外。臼井より筑波山に至る約半里（2km）の登山道は大いに健脚を誇るべき所にして、壮快また言うべからず。もし水戸線の下館駅よりすれば、道程7里（28km）その山すそまでは砥石のごとく平らな県道にして、雨中なお又スカルミにならず、人力車賃60銭内外なり」とある。

1916年（大正5）筑波鉄道の第1期工事が土浦—筑波間で着工され、1918年4月17日夜、土浦発19時50分の終列車から営業を開始した。第2期工事は同年6月7日筑波—真壁間が開通し、第3期工事は同年9月7日土浦—岩瀬間40.1kmの全線が開通した。1926年5月には上野—筑波間に直通臨時列車が運転され、遊覧列車と呼ばれた。筑波鉄道開通直後しばらくは、従来のメインルートの北条駅下車の六丁通りを通過して登山していたが、2～3年もすると参詣登山客のほとんどは、少しでも近い筑波駅（沼田）で下車するようになった。筑波駅前には土産物・飲食店が並び、鳥居もつくられ、筑波神社までの2kmの西山道を徒歩で登山参詣するようになった。六丁通り1丁目から南西に下る横道がメインルートとなった。

1922年（大正11）、筑波駅から筑波神社前まで自動車道路が開通し、翌23年には乗合自動車が神社前まで通い、客足は西山道から自動車道路へと移った。鉄道とバスの開通によって最も影響を受けたのは、かつてのメインストリートであった六丁通りであった。宿屋・土産物屋は閉店し、代ってバス通りの両側に新しい門前町が形成された。原初的な門前町のみられた府中街道・真壁道・椎尾などの没落はいうまでもない。府中街通の十三塚の宿屋はすべて閉店し、多数の僧坊と数軒の宿屋のあった椎尾山薬王院は、鉄道の開道後は僧坊も宿屋もつぶれてしまった。

1825年（大正14）、筑波神社北西から山頂まで全長1605m、高低差495mのケーブルカーが開通し、スイス製の車体にドイツ製のロープを取り付け、日本では5番目、関東では箱根に次いで2番目のケーブルカーであった。登山客は一躍20倍に増え、乗客は延々行列をなしたという。

六丁通りからバス通りへの門前町の立地移動を、明治初年頃の商店・旅館・遊女屋・土産物屋などの分布と、今日の分布と比較対照してみると、立地移動が明らかである。明治初年頃の状態は、「のびゆく筑波」⁸⁾の中にある店名を1982年12月聴き取り調査により、2,500分の1の研究学園都市計画図上で位置を確認した（Fig. 2）。

明治初年の旅館・土産物屋などの分布をみると、六丁通りと並んで東山に9軒の旅館と7軒の土産

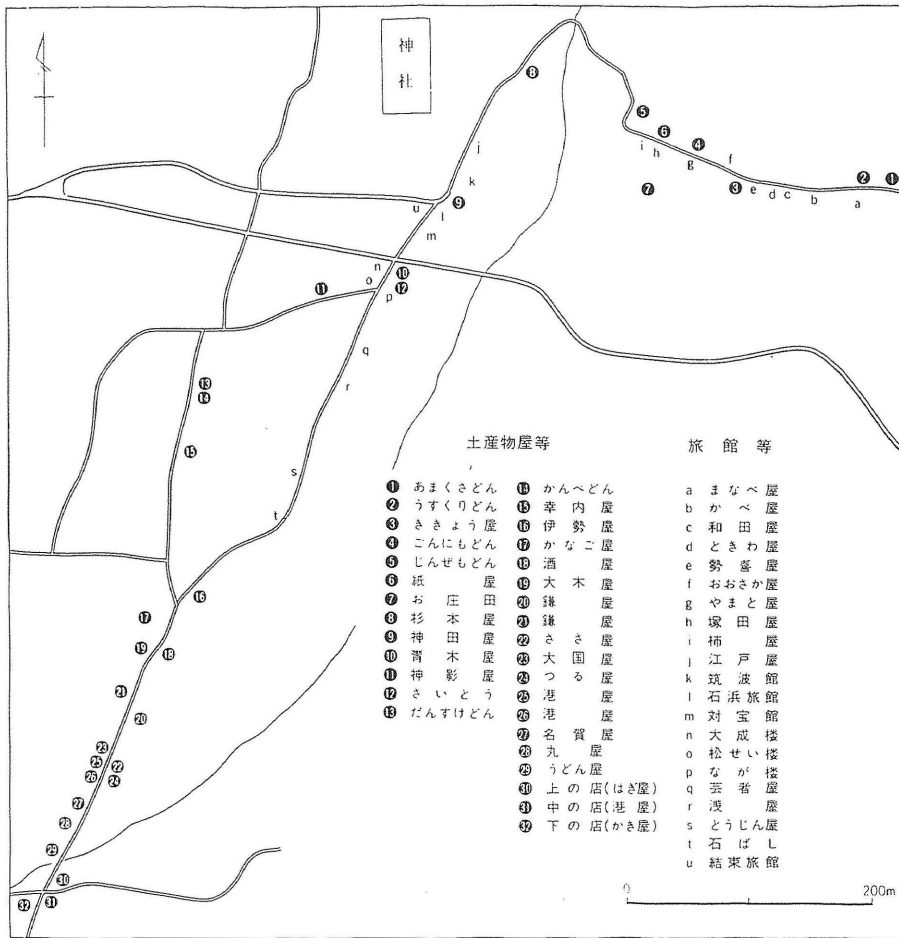


Fig. 2. 明治初年頃の筑波山門前町
Souvenir shops, Inns and brothels in ca. 1870 in Tsukuba Monzenmachi

物屋が並び、石岡からの府中道が筑波山参詣道路として繁栄していた様子を示している。今日でも東山は総二軒のせがい造りの旧旅館風の家屋が軒を連らねていて、一世紀前の繁栄の跡を止めている。

六丁通り門前町の1～3丁目には旅館や遊廓が並び、下方の4～6丁目の石鳥居までには土産物屋が並んでいたことが分る。

1922年の神社前までのバス道路の開通後、六丁通りや西山道り沿いにあった旅館や商店などは、例えば青木屋旅館や幸内屋土産物店のよう、店を旧道沿いから新しい自動車道路沿いに立地移動した。立地移動できなかった商店は、人の流れの変化とともに閉店に追い込まれていった。

軍需用に供出されて1944年に取りはずされていたケーブルカーも1954年11月に10年振りに復旧されると、上野—筑波間に「自然科学列車」が開通し、東京の学童がドット訪ずれるようになった。1965年4月、つつじが丘まで筑波スカイラインが開通し、同年8月にはつつじが丘から女体山へのロープウェーが開通して、つつじが丘が新たな観光の中心となってきた。1969年には筑波山は水郷筑波国定公園に指定されて全国的知名度を高めた。1974年10月には東方藤沢から丘陵の尾根を走る表筑波

スカイライン（パープルライン）がつつじが丘まで開通して、ドライブウェイによる周遊ルートができる。筑波山門前町は車にとっては通過点となり、駐車場不足もあって、袋小路の門前町および筑波山神社には立ち寄らない観光客も増えてきた。

ケーブルカー・ロープウェイ・旧真壁道のユースホテルまでの自動車の乗り入れ可能などによって、山頂へのアクセシビリティが高まると、山頂の店も増えてきた。女体山と男体山の間の平坦な御幸ヶ原には、依雲亭・迎客亭・遊仙亭・向月亭・放眼亭の5戸の茶屋しかなく、この五亭が名物の夫婦餅と田楽豆腐をひさぎ、参拝客の休憩の便に供していた。今日ケーブルカー駅周辺の御幸ヶ原には12の土産物店・レストランが軒を連ねている。これらの山頂店の経営者や売子は六丁通りなどからケーブルカーで通勤してくる者もあり、交通革命に適応した人間の生計生態の変化といえる。

Ⅲ. 門前町の生態

筑波山門前町の範囲を区画することはできても、それを統計的に扱うことは容易ではない。大字筑波（人口905、世帯数252）が最も門前町に近い単位ではあるが、統計単位としては筑波町（1980年の町域77.08km²、人口22,553人）か、旧筑波町（面積13.90km²、人口3,670、世帯数908）を用いざるをえない。筑波町は1955年2月1日、旧筑波町・田井村・北条町・田水沢村・小田村の5町村が合併して成立し、さらに2年後の1957年に菅間村が合併し、旧2町4村から形成されている。旧筑波町は筑波・沼田・国松・上大島の4大字から成り、江戸時代に筑波町と沼田村は筑波神社領、国松村と大島村は旗本井上源三郎領であった。

本来の意味の門前町を中核とする大字筑波と、関東鉄道筑波線筑波駅の駅前門前町のある大字沼田（1980年の人口997、世帯数252）を含む旧筑波町（1980年の人口3,670人、世帯数908）が門前町を統計分析するぎりぎりの統計単位である。

Ⅲ-1. 産業構造

経年的に追えるのは現在の筑波町町域全体の産業構造しかない。1980年国勢調査時の有業人口11,900人の産業構成は、農業（31.6%）を筆頭に、サービス業・卸小売業・製造業が主要なものである。産業別就業者数を経年的にみると、就業者総数は2万人台とほぼ一定しているが、農業は急減し、代って建設業・製造業・サービス業・公務・卸小売業などの第二次・第三次産業部門が増加してきた。これは日本の地域の産業構造一般の変化と同じである。筑波山門前町にやや近い旧筑波町の産業構成は、1950年以前のものしか入手できない。1950年の旧筑波町の産業構成と、今日の筑波町町域の産業構成を比べてみると、旧筑波町は卸・小売業10.0%（現筑波町域7.9%）・サービス業7.1%（5.6%）・運輸通信電気ガス水道業3.3%（1.9%）に特色があり、相対的に農業70.2%（76.1%）のウエイトが低い。戦前の1930年の職業構成をみても、旧筑波町は商業19.8%（現筑波町域12.9%）、交通業2.3%（1.2%）、公務自由業4.1%（2.9%）に若干アクセントがあり、相対的に農業62.8%（72.2%）的色彩が低い。1980年の大字筑波は252世帯中、農家は52戸（20%）に過ぎない。

1950年・1930年ともに旧筑波町と現筑波町域の産業別構成の差はわずかである。これは旧筑波町と

Table 1 筑波町の産業・職業構造

年次	1930	1950	1960	1965	1970	1975	1980	
総人口	17,598	23,431	23,817	22,091	21,308	22,011	22,558	その割合
就業者数	9,399	10,933	12,293	11,581	11,951	11,415	11,900	100.0%
漁業・水産業	3	—	—	—	1	10	1	0.0
林業	6,782	15	23	13	6	5	5	0.0
農業		8,312	8,496	7,077	6,274	4,610	3,757	31.6
鉱業	6	16	85	49	62	45	41	0.3
建設業	866	147	266	316	479	695	870	7.3
製造業		543	492	811	1,433	1,825	1,978	16.6
卸・小売業	1,210	866	1,347	1,474	1,606	1,935	2,009	16.9
金融・保険業		26	83	101	12	10	25	1.9
不動産業								
運輸・通信業	116	205	304	406	446	450	484	4.1
電気・ガス・水道業			20	23	28	50	41	0.3
サービス業	—	614	971	985	1,220	1,630	2,086	17.5
公務	273	168	205	219	273	300	375	3.2
その他・分類不能	60	11	1	12	—	10	5	0.0

(各年次センサス)

(1930年は職業大分類による就業者数で、商業を便宜上卸・小売業と保険業に入れたが、サービス業も当然含まれる。)

いえどもその半分は大字国松・上大島の農村部が占めているためか、あるいは門前町が成田・琴平・長野などに比して未発達な段階に止まっているためと考えられる、本来門前町研究は門前集落を対象とすべきで、行政単位での統計的処理にはなじまないものであるらしい。

III-2. 土地利用・農業

今日の門前町は筑波山神社の南側の東西方向のバス通りと、東側の歩道に沿って約500mの長さにわたって発達している。前述の様に1918年の筑波鉄道開通以前は、南麓の大字臼井から江戸時代に形成された六丁通りを徒歩で参拝していた。それゆえ門前町の生態環境を明らかにするために、1978年1月に石井英也・藤井公子・尾崎浩司・加々美雅弘・柏雄司らとともに2,500分の1「研究学園都市計画」図をベースマップに神郡との地境をなす逆川以北、神社までの範囲の土地利用図(Fig. 3)を作成した¹⁰⁾。

この土地利用図を西は男女川、東は千手川の東西約50mの幅で海拔30mから筑波山神社上方海拔300mまでの、高度10m間隔ごとの土地利用割合を計測した(Table 2)。作成した土地利用図上に80mメッシュをかけ、その交点の土地利用を読むことによって土地利用割合を計測した。

江戸時代の六丁通り門前町は海拔110mから今日のバス通りの海拔230mまでの比高120mにわたっ

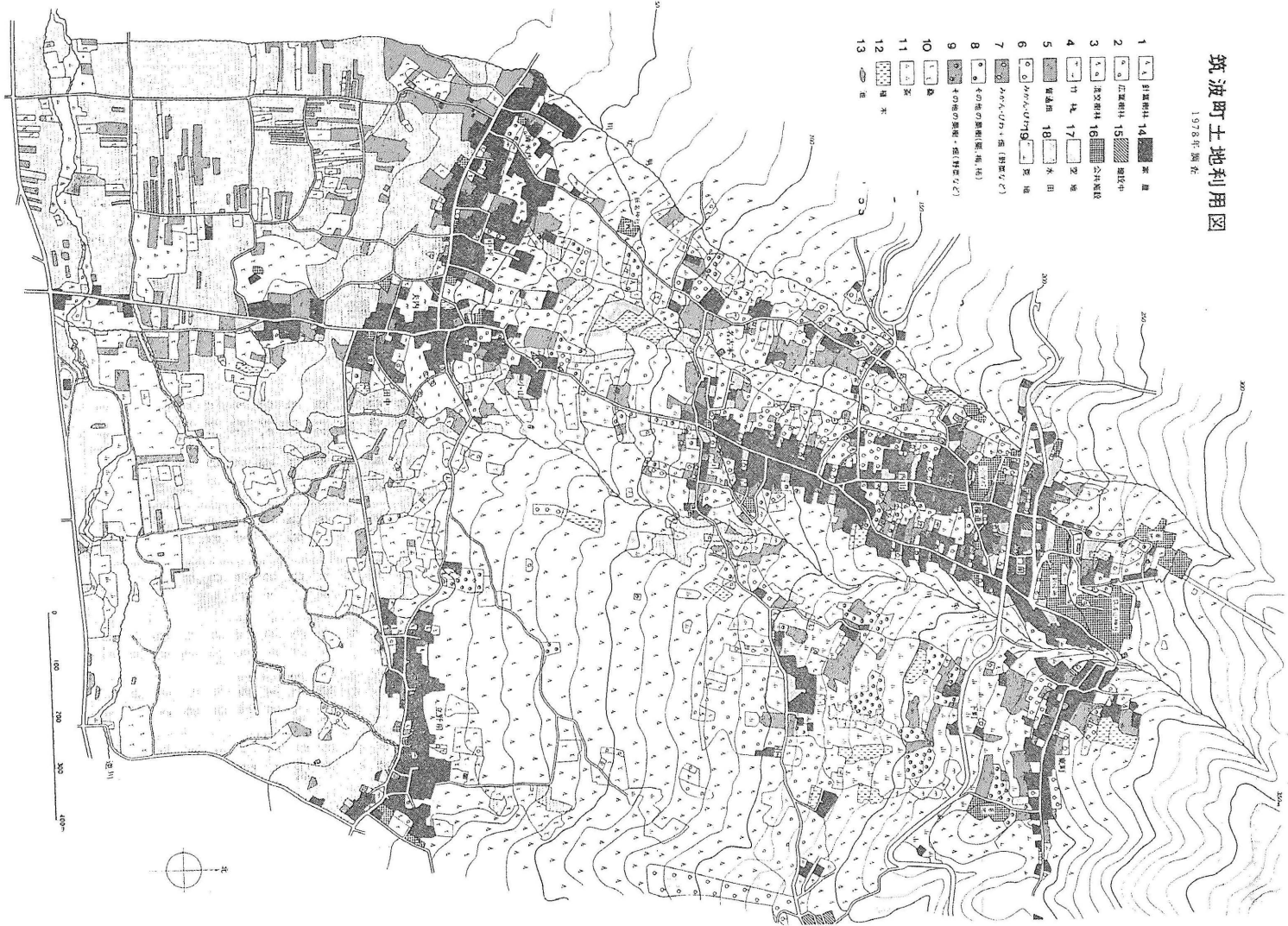
Fig. 3. 筑波山門前町の土地利用

Land use of the Tsukuba monzenmachi (1978). 1. Coniferous tree 2. Broadleaf tree 3. Mixed forest 4. Bamboo 5. Arable land 6. Mandarin and loquat 7. Mandarin, loquat and vegetables 8. Other fruit trees (chestnut, plum, persimon) 9. Other fruit trees and arable land 10. Mulberry field 11. Tea 12. Garden tree 13. Pond 14. Housing estate 15. Housing estate under construction 16. Public establishment 17. Open land 18. Paddy field 19. Waste land

筑波町土地利用図

1978年調査

- 1 1.1 針葉樹林 14 雑草
- 2 1.2 広葉樹林 15 灌叢中
- 3 1.3 落葉樹林 16 公共施設
- 4 2.1 竹林 17 空地
- 5 2.2 雑草地 18 水田
- 6 3.1 雑草/シロアリ 19 築地
- 7 3.2 アサギ/シロアリ 築地
- 8 3.3 その他の雑草類(雑草)
- 9 3.4 その他の雑草類(雑草)
- 10 4.1 雑草
- 11 4.2 雑草
- 12 5.1 雑草
- 13 6.1 雑草



て延びている。高度別土地利用の集落をみると、今日のバス通りに沿う門前町が東西に発達している。海拔220~230m付近で58.8%が集落と、最も集落占拠率が高くなっている。海拔60~110mは大字筑波と大字臼井の境界で集落がなく、森林・荒地・桑・植木などが目立ち、最近では別荘や引退生活者の家が散見されるようになってきた。高度が高いための眺望の良さ、冬暖く夏涼しい気候、静閑で緑の多い周辺の環境などが、引退生活者に魅力となっている。

水田は140mを上限として主に40m以下の臼井・立野集落南側の逆川谷底平野に展開している。しかし、水田の中に島畑状に桑園や普通畑が散在している。筑波山門前町の植生の特色の一つとして、暖

Table 2. 筑波山門前町の高度別土地利用
(西は男女川, 東は千手川の幅400~600mの帯)

海拔高度 m	土 用 地 利 用 目 林	畑	果 樹	桑	植 木	水 田	集 落	荒 地
300	85.3						14.7	
290	68.9		2.2				20.0	5.5
280	73.3		3.3				20.0	3.3
270	41.9	2.3	4.6		4.6		39.5	7.0
260	37.8	10.8	5.4				35.1	10.8
250	30.6	5.6					50.0	13.9
240	11.4	9.1	18.2				52.3	9.0
230	5.9	14.7	8.8				58.8	11.8
220	6.2	12.3	15.4				50.8	15.4
210	23.7	2.6	7.9				57.9	15.4
200	28.6	7.1	14.3		2.4		47.6	
190	24.2	27.3	9.1		9.1		24.2	6.0
180	40.0	6.2	13.8		1.5		27.7	10.8
170	57.4	11.1	1.9				22.2	7.5
160	49.2	16.9	13.8				15.4	5.0
150	48.0	8.0	12.0	0	0	0	24.0	8.0
140	29.1	18.2	14.5	1.8	1.8	1.8	21.8	10.9
130	47.3	7.3	3.6	0	1.8	0	18.0	21.8
120	29.0	5.8	11.6	0	1.4	2.9	17.4	31.9
110	14.0	20.0	12.0	2.0	0	8.0	4.0	40.0
100	48.5	6.1	6.1	1.5	4.5	4.5	4.5	24.2
90	41.7	5.6	2.8	4.2	8.3	4.2	0	33.4
80	53.1	3.1	9.3	12.5	0	3.1	5.0	14.5
70	50.6	10.1	5.0	6.0	0	3.4	10.0	13.3
60	51.1	10.6	1.1	9.0	0	4.3	16.0	8.5
50	38.6	7.7	3.0	5.8	0	0	40.6	4.3
40	5.9	11.3	1.2	3.5	0.6	38.8	24.6	14.1
30								

帯性のビワ・小タチバナ・温州ミカン・オリーブ・照葉樹などがある。「筑波ミカン」として知られる小さなタチバナは東山を中心に古い畑や家の庭に散見できるが、万葉の時代からあったことは歌などからもうかがえる。温州ミカンは1950年に渡辺恒男が愛知県から取り寄せて栽培し始めて普及した。主に海拔100~240mにかけて栽培され一部は観光園として利用されている。1978年現在筑波町全体では46戸が6.43haのミカン園を栽培している。筑波山南麓の温暖の島は古くから指摘されていたが、小林守¹¹⁾の1978年1月28日の調査によると、最低気温が逆川低地で-4°Cであった。これは冷たく重い気流が底に溜り、温い空気が250m付近に溜るためと説明されている。普通畑は全体で約1割程度のウェイトで、どの海拔高度でもみられる。畑作物は猪・兎の害が多く、作付地の周囲に猪垣を設けて防いでいる。

森林もどの高度でもよく見られ、海拔270m以上は7割が森林で、筑波山神社社有林となっており、神社林務班に

よって管理され、礼拝に使用する榊の採取などが行なわれている。臼井集落の農家は古い湧水や井戸を飲用水として利用していたが、それらの水源保全林的機能をはたしているともみることができる。

海拔110mの6丁目の石の鳥居(写真4)から上方神社へ向って石の坂道を登ると、道の両側に東

西に細長い宅地区画が続き、各所に離村したと思しき宅地跡が今日は空地・畑・駐車場などに利用されていて、往時の繁栄をしのばせている。道沿に真黄な温州ミカン・夏柑・オリーブ・ビワなどが庭木として用いられ照葉樹とともに、温暖な気候と門前町の立地条件の良さを偲ばせる(写真5)。2丁目付近になると往時の石段が現われ、遊廓跡を偲ばせる家が今日は無人の宿となっている(写真6)。

土地利用で見て分る通り、筑波の農家は1980年52戸で総世帯252の20.6%を占めるに過ぎない。専業農家4、第1種兼業農家1、第2種兼業農家47と、9割が第2種兼業農家である。大字筑波の1980年の総経耕地面積は31.63ha、うち田28.08ha、樹園地1.62ha、畑・草地6.93haである。1農家当たり平均経営耕地面積は60.8aであるのは、低地の水田が桜川付近にまで分散しているからで、街村をなす六丁通りの農家から下の方へ一種の通勤耕作を行っており、モータリゼーション以前の時代には、馬による収穫米の運搬が大きな労働消費であった。

1980年1月筑波山神社下にある筑波第一小学校にお願いして、後述のアンケート調査を行なった。それによると農家の52%は農業経営の目的が自給用であり、21%が他人に土地を貸与しており、さらに21%は労力不足と猪などの害のため農業を行なっていなかった。これが高度別土地利用に現われた荒地の多さとある程度対応する。

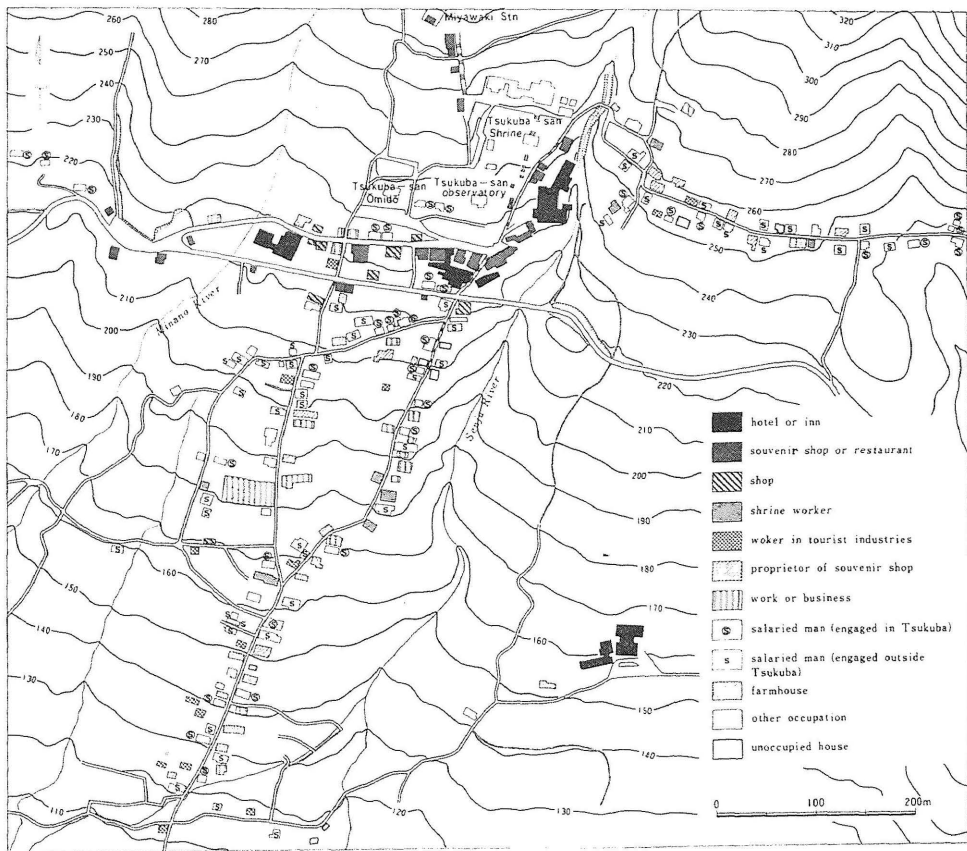


Fig. 4. 筑波山門前町における建物の機能 (1982年)
Buildings according to functions in the Tsukuba Monzenmachi 1982

III-3. 職業の地域的構成

筑波山門前町を構成する1戸1戸について1980年3月、小林滋・村越弘・脇坂晴久らとともに屋号・職業・前職・居住年数・転入地などを調査した¹²⁾。

バス通りと神社東側へ通ずる小路に沿ってはホテル・旅館・土産物屋が並んでいる (Fig. 4)。大字筑波の農家52戸の9割が第2種兼業であるのを反映するかのよう、サラリーマンは六丁通り、西山通り、東山、門前などいたるところに住んでいる。神官など神社勤めの人々は東山や六丁通りに住み、門前商店街・ホテルや山頂の土産物屋・飲食店に出店していたり、そこに雇われている人も六丁通りや東山に住んでいる。山頂の店へはケーブルカーで通勤している。農家は六丁通りの下の方にみられ、水田への接近の便をうかがわせる。

このように門前集落と呼んでいる家々の職業構成は雑多である。他市町への通勤サラリーマンなど多様な収入源によって門前集落は支えられている。しかし、筑波山神社・ホテル・旅館・土産物屋・観光客相手の飲食店など直接筑波山神社観光客相手の神社とその門前商店街の周囲にそれらへ働きに行く人々がバス通りからは見えない六丁通り・西山・門前・東山に住んでいる。

1918年の筑波鉄道開通までのメインストリートであった六丁通りから、今日のバス通りへ出店した店 (例えば幸内屋) や旅館を立地移動した青木屋、六丁通り衰退後、ケーブルカー駅前や山頂に出店するようになった家など、交通機関の発達によって店や商業機能の立地移動がみとめられる。明治初年頃の旅館・土産物屋の分布 (Fig. 2) と今日のそれ (Fig. 4) を比べてみると、門前町メインストリートの立地移動は一目瞭然である。

筑波山鋼索鉄道KKの筑波山月別観光客数によると、最も多いのが9月 (22万人、1974年) の遠足、次いで4月 (20万人) ・5月 (18万人) の春の行楽シーズン、11月 (18万人) の秋の紅葉と夏休みの8月 (17万人) である。新年三が日は筑波山神社前から斜面のバス通りを経て沼田まで、さらには国道125号を通過して桜川右岸の学園都市内幹線の東大通り北端にまで延々8~10kmもの参拝客の車の列ができるという信じられない現象が毎年見られる。駐車場が少なく、車が回遊できない袋小路の門前町の構造のためである。成田山新勝寺のようにいろんな方向から入って来れる門前町とは構造上の違いがみられる。

しかし平常の日は参拝客も少なく、週末のみ開店しウィークデイは開店しない土産物屋もあり、兼業・副業的門前の店もある。それらの店主は教師やサラリーマンで他市町村で働いて安定収入を確保し、週末とか忙繁期のみパートタイム労力の助力を得て開店している。

宿泊施設も門前町としては少なく、旅館5にユースホテル1の6つしかない。三代將軍家光の時創業したという神社東側の江戸屋、当主が町議会議長を勤めたことのある青木屋、水戸藩の外敵打ち払いの過激派 (テング党) の幹部藤田小四郎の書いた書を蔵する対室館 (写真7)、経営の行き詰った山水荘を引き継いだグランドホテル、門前町から200mほど離れているが温泉を掘り当てた和楽園、それに昔の遊廓“なが楼”が変じたユースホテルである。

筑波山神社官司青木芳郎および青木屋当主への聴き取りによると、他の門前町にみられる講組織は弱く、筑波講・大同講・御六神講など筑波山の見える地域でのみみられた。山形方面の客が団体に割

合多く、厄年の団体が旅館の先導で神社でお払をしてもらったり、年男の団体がお払をもらったりのケースがあり、今日では旅館が先達の役割を担っている。

3月3・4・5・6日の筑波大学受験期には、大学から15kmも離れているにもかかわらず、かなりの受験生が宿泊し、旅館組合でバスをチャーターして大学まで受験生を送迎し、受験生は門前町旅館の貴重なお客となってきた。

江戸時代からの筑波山の名物夫婦餅は関鉄筑波駅前の大字沼田で作られている。しかしガマはじめほとんどの土産物は今日問屋が車で注文取りに来て、持ってきてくれるので、地元産業との関連はほとんどない。ガマの油と呼ばれる油薬は、筑波町大字北条の山田薬局の製造で夫婦餅と並んで数少ない地元製品である。

Ⅲ-4. 居住年数・社会的流動

1977年1月と1980年2月の2回、筑波第一小学校に依頼して、在校生世帯全員に「筑波山神社門前町の構造と生態に関する地域調査」のアンケートを行なった。1977年は回答数59、1980年は54で、学校を通しての調査であったため回答率はほぼ100%であった。筑波第一小学校は大字筑波地区内にある唯一の学校で6学級、生徒数77(1976)、兄弟が在学している世帯には上の生徒に調査表を配布してもらった。1980年の世帯数は大字筑波で252、1975年220であるから、アンケートの対象捕捉率は1/4～1/5であった。

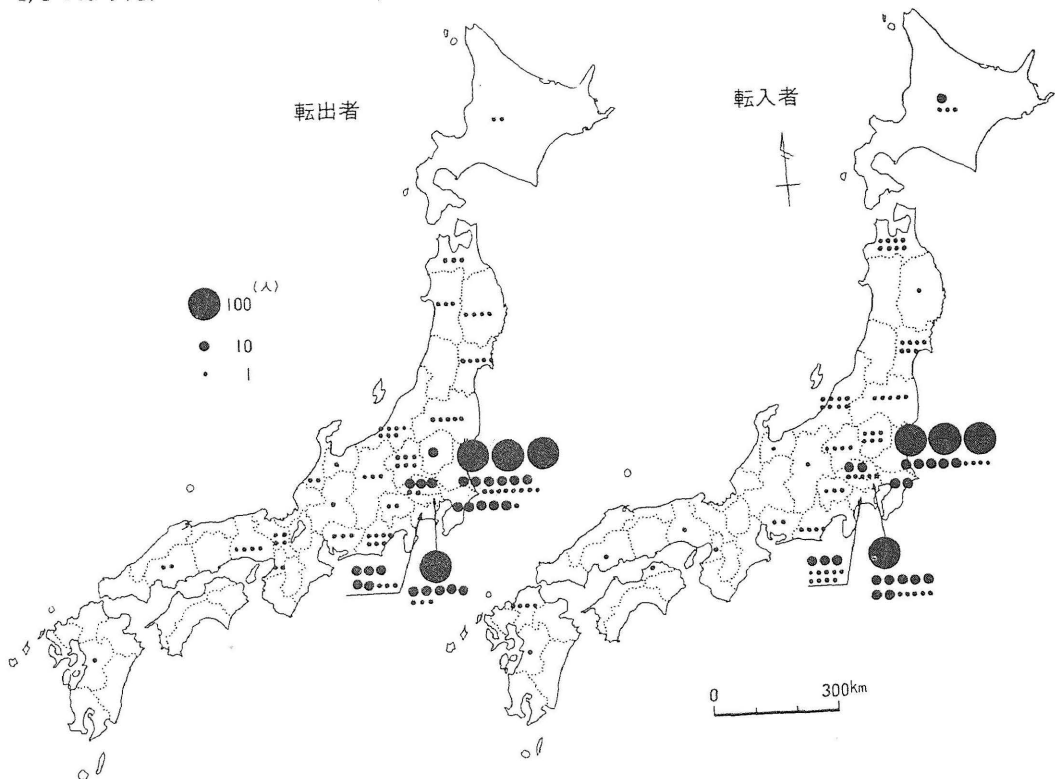


Fig. 5. 筑波町からの転出地および筑波町への転入地(1979年)
Out - and in - immigrants of the town of Tsukuba in 1979.

1980年の調査による居住年数は5年未満5世帯、5～10年5、第2次大戦以後5、昭和期初め以後6、大正期初め以後2、明治期初め以後3、江戸期以来28(51.9%)で、過半数が江戸期以来の古い家である。古い家は屋号をもっている。

屋号をあげてみると、頭入屋・柿屋・はつね・釜屋・桔梗屋・神田屋・沢田屋・永屋・大越屋・筑波館・尾張屋・伊勢屋・大国屋などの外、新しいものとしては神橋亭・筑波山ドライブイン・和楽園などである。明治初年の屋号はFig 2に見られるように、ほとんどの旅館・土産物屋は屋号をもっていた。

1977年のアンケートによると、「ずっとこの土地に住むつもり」が60.3%で、偶然江戸期以来住んでいる52%の世帯とほぼ一致していると考えられる。「事情が許せばよそへ移りたい」が20.7%と意外に高く、「わからない」19.0%とともに、定着志向は高くはない。具体的にどこへ移りたいか記入した人では、「平地へ」、「勤務地へ」、「自分の家のあるところへ」など、サラリーマン世帯が移動志向が強いことを示している。「将来は東京へ移って、現在の家は別荘にするつもり」の人もおり、事実ウィークエンドハウスや別荘風のものもチラホラ散見する。

1975～80年の過去5年に、大字筑波の世帯数は220から252へ増加し、人口も891人から905人へ若干増加した。1970年の1年間の筑波町の社会的流動は転出368に対して転入712、差引344の社会増であった。その地域的分布をみると、最大の転出先は茨城県内(50.1%)、次いで東京都(20.8%)・神奈川県(7.2%)であった(Fig. 5)。最大の転入地は茨城県内(51.1%)からで、次いで東京都(24.6%)・神奈川県(5.5%)で、転出と全く同じ地域的結び付きをしめしている。すなわち過半が地元茨城県で、残りは東京都市圏である。

III-5. 住民意識

1980年の有効回答52世帯の世帯規模をみると、6人世帯32.7%、5人世帯32.7%、4人世帯17.6%で、同年筑波西中学校でのアンケートの6人世帯28.5%、5人世帯26.8%に比べると、筑波は相対的に大世帯である。しかし、1980年センサスによると一世帯当り人口は3.6、1975年は4.1人で、やはり小学生のいる世帯は平均よりは大きな世帯であると考えざるをえない。

筑波の男女比は1980年センサスによると、女100に対して男85.8(1675年は82.6、町全体では93.7)と、男子の割合が非常に低い。土地の人は水のせいでも女子が多く生まれるのでは、ともいっている。筑波町内の大字別でも大字筑波の男子の対女性比は最低である。1977年の通勤先は50.0%が大字筑波内、25.8%がそれ以外の筑波町内、18.2%が土浦市、6.0%がその他であった。半数が自分の大字内で生計の資を得ているところに、筑波門前町の生計の一つの特色があり、都市近郊農村とは異質である。

(1) 子供の教育に対する意識

1977年のアンケート回答世帯56の「子供に希望する進学高校」では、土浦一高39.3%、土浦二高19.6%、筑波高校17.9%、土浦工業高校12.5%、下妻高校3.6%であり、進学させないは0%であった。1980年筑波西中学へのアンケート¹³⁾に比べると、子供が小学生段階ということを考慮したとしても、高い進学志望と上位校志望が感じられる。事実聴き取りによっても、大字筑波は旧制土浦中学を経て、旧制帝大や専門学校を出て外で活躍している人の話をよく聞くように、教育水準は高い。

(2) 余暇の過ごし方

1977年のアンケートで、重複選択させた結果、「ショッピング」22.0%、「TV・ラジオ」19.0%、「家庭だんらん」16.1%、「休息・くつろぎ」11.7%、「遠出・旅行」9.4%であった。同年の竹園東中学校旧住民に対する同じアンケートの結果（TV・ラジオ45.2%、家庭だんらん26.4%、休息・くつろぎ23.6%、趣味・娯楽21.6%、旅行13.7%、ショッピング12.7%）と比べると、ショッピングの比重が高い。門前町の商店街が未熟とはいえ存在するのに、それは観光客用のものであるため、やや隔絶した門前町住民にとってはレクリエーションを兼ねた主として土浦へのショッピングは、必需品購入とともに、余暇を過ごす方法ともなっている。

レジャーに使う交通手段は、65.5%が自家用車、32.8%が電車バスである。

(3) しきたり意識

1977年には、「あなたは自分が正しいと思えば、世のしきたりに反しても、それをおし通すべきだと思いますか、それとも世間のしきたりに従った方がまちがいないと思いますか。」に対する52世帯の回答は、「場合による」82.7%、「おし通すべきだ」7.7%、「従った方がまちがいない」9.6%は、同年竹園東中学でのアンケート結果の新住民（それぞれ82.9、6.2、7.8%）に非常に近く、旧住民（それぞれ67.5、19.2、8.0%）とは大きく異なっている。筑波門前町住民のしきたり意識は、農村型よりは、非常に都会型に近く、門前町という性格が反映していると考えられる。

(4) 生活程度の意識

1977年には、「上」0%、「中の上」2.1%、「中の中」61.4%、「中の下」12.3%、「下」5.2%で、日本人一般の「中の上」意識よりは厳しい見方をしている。

耐久財の所有率を11品目について調べ、竹園東中学と比べてみる。電気洗濯機100%（竹園東中新住民99.2%、旧住民97.6%）、電気冷蔵庫98.3%（99.2、97.2%）、カラーTV98.3（94.6、93.8）、電気こたつ96.6（93.8、96.2）、百科事典76.3（75.2、68.8）、乗用車72.9（71.3、75.7）、ピアノ・オルガン69.5（48.8、44.7）、ステレオ49.2（77.6、59.6）、ベッド47.4（74.4、53.0）、電子レンジ33.9（22.5、31.5）、応接セット32.2（72.1、33.6）。ステレオ・ベッド・応接セットを除くと竹園東中よりも所有率は高く、低いものは団地生活に必要なものだけである。耐久消費財所有率が竹園東中よりも高いにもかかわらず、意識の面では「中の中」といったシビアな、さめた意識をもっている。

(5) 筑波の将来に対する意識

1977年のアンケート回答世帯主の職業継続意識は、「余程のことがなければ続けてもよい」48.1%、「ぜひ続けたい」31.5%、「考えたことがない」11.1%、「できれば他の職業に変わりたい」9.3%である。

筑波町全体の将来についてどのように考えているか、の展望は、「徐々に良くなっていくだろう」55.2%、「今後大きく発展していただく」20.7%、「このままではないだろうか」19.0%、「だんだんとさびれていくような気がする」5.2%。

将来は良くなるであろう、と期待を込めたポジティブな見方が8割弱を占めている。しかし第2次オイルショックを経た1980年のアンケートでは、ややペシミスティックな見方が強くなってい

る。「今後大きく発展して良くなっていくだろう」が20.7%から5.9%へ、「徐々に良くなっていくだろう」は55.2%から52.9%と変化なく、「このままではないだろうか」が19.0%から29.4%に増え「だんだんとさびれて行くような気がする」が5.2%から11.8%へ増えている。

(6) 宗 教

1977年のアンケートでは、58.0%の世帯が神道、12.0%が創価学会、真言宗・天台宗・浄土宗が各4.0%であった。1980年アンケートでは、神道67.4%、真言宗・浄土宗各7.0%、創価学会・立正佼正会各4.3%であった。

筑波山神社の門前町であるので神道が第一位であることは当然としても、その勢力は7割を越えず、意外に他の宗派が多いのに驚かされる。茨城県師範学校・茨城女子師範学校共編（1939）『綜合郷土研究 中』によると1933年の仏教寺院分布で茨城県では真言宗が最も多く35.3%、筑波郡は52.9%が真言宗であった。

(7) 買 物

1977年のアンケートによる筑波門前町住民の7品目の購入地調査の結果は次の様である。野菜は70.6%の世帯が大字筑波内で、11.8%が北条、11.8%が沼田で購入している。肉は38.5%が筑波、25%が北条、25%が沼田、日用品は53.7%が筑波、28.5%が北条、13.0%が土浦、11.1%が沼田であった。これら生鮮食料品や日用品と対象的なのが家具で、88.7%が北条、22.4%が筑波、20.4%が土浦と多様である。散髪は54.7%が沼田、22.6%が筑波、15.1%が土浦であり、美容は60.4%が沼田、筑波20.8%、北条12.5%である。大字筑波の商業機能は地元住民にとっては生鮮食料品と日用品提供の機能しかはたしてないといってよい。

1979年度農村地域整備状況調査（国土庁地方振興局農村整備課）によると、農業集落筑波の主な購入先は、鮮魚・肉類は筑波、日常衣料品は筑波以外の各市町村内の商店、高級衣料品・家具・電気製品は他市町村内の商店（具体的には土浦）となっている。これは、調査票記入者の役場の職員の判断と思われ、電気製品に関してはアンケート調査と異なっている。

Ⅳ ま と め

本研究の目的である筑波山門前町の立地生態を、形態・構造・形成・機能の面から分析考察してきた。形態・構造的には中核となる神社とその門前商店街があり、それを周辺集落が取り巻いている。歴史的・形成的には形態・構造も時代、とくに交通機関の発達によって変形してきた。具体的には東山・六丁通り門前集落から、バス通り門前集落やケーブルカー駅前・ロープウェー駅前・筑波山頂駅前門前集落の形成であった。

形態・構造の変化に応じて、それぞれの集落部分のはたす役割も変ってきた。東山・六丁通りは旅館・土産物店などの並ぶ門前商店街から、新しい門前商店街の店舗のオーナーや労働者・旅館従業者・神官・社務所雑役・神社社有林山林労務者さらにはケーブルカー・ロープウェー勤務者・気象庁職員・東大地震研究所職員などの住宅地と化している。神社前の記念撮影担当写真屋、東山西端の神社のお札や護摩製造木工者、タクシー業者、若干の農民など門前町内で収入を得ている人々の外に、門

前町以外で収入を得るサラリーマンも多く住みついている。このように筑波山門前町は神社と門前商店街機能を中核とする雑多な機能のからみ合った門前町複合体をなしていることが明らかになった。

門前町としての機能が低い筑波の場合、他の大きな門前町と比べて、中核部の発達が未熟で、門前商店街の間に民家が介在したり、商店が観光客相手と地元民への日用品供給機能を兼ねているようなものも散見できる。門前町は神社・仏閣とその門前商店街が外見的には明るく賑やかな表の部分であるが、それらを支える労働者の住む静かな裏の部分も重要な要素であるし、交通機関の発達によってその表裏が交代する場合があることが明らかになった。(1983年1月16日)

研究に当り筑波山宮司青木芳郎、筑波第一小学校、筑波町役場その他多くの方々のお世話になった。記して深謝の意を表したい。図の多くは宮坂和人・小崎四郎氏に製図してもらった。同様に記して謝意を表したい。

本研究をまとめるにあたり、昭和56年度文部省科学研究費補助金(一般研究C)奥野隆史「わが国における交通のイノベーションの地域経済の関係に関する地理学的研究」(課題番号56580163)の一部を使用させてもらった。

注・参考文献

- 1) 田中啓爾(1933): 門前町(信仰集落)としての成田町。『地理学論文集』古今書院, 499-515.
- 2) 浅香幸雄(1959): 信仰登山集落の形成(第1報)——木曾御嶽の場合——。地理学研究報告Ⅲ, 183-243.
 〃(1963): 富士北口の上吉田・河口の御師町の形態とその構造——信仰登山集落の形成 第2報——。地理学研究報告Ⅶ, 55-82.
 〃(1967): 大山信仰登山集落形成の基盤。地理学研究報告Ⅺ, 179-196.
- 3) 岩鼻通明(1981): 観光化にともなう山岳宗教集落戸隠の変貌。人文地理 33-5, 74-88.
- 4) 藤本利治(1970): 『門前町』古今書院, 20頁.
- 5) 茨城大学文理学部地誌学演習・教育学部社会科教育講座(1955): 筑波町集落の地理学的研究—昭和30年度地誌学演習臨地研究報告—(ガリ版刷り)。によると、昭和19年の筑波神社崇敬者名簿による筑波山神社の信仰圏は、結城・古河・足利・桐生・岩槻・松戸などの、北関東から江戸川沿いの埼玉県東部・千葉県南部にかけての、筑波山がよく眺望できる範囲である。
- 7) 木村 繁(1977): 『筑波山』 尚書房 (復刊1刷) 311頁に収録.
- 8) 筑波町教育研究会社会科学研究部(1975): のびゆく筑波
- 9) 筑波町史編纂委員会(1938): 筑波町史 史料集 第一篇
- 10) 佐々木博(1979): 筑波門前町の形成。筑波の環境研究 4, 28-30.
- 11) 小林 守(1979): 熱映像による筑波山の温暖帯の測定。筑波の環境研究 4, 180-185.
- 12) SASAKI, H. (1982): Geographical analysis on the Tsukuba Monzenmachi. Ann.Rep. Inst. Geosci., Univ. Tsukuba, no 8, p.16-18.
- 13) 佐々木博(1982): 筑波研究学園都市の社会地理学分析。人文地理研究, VI, 213-236.

Locational Ecology of the Tsukuba Monzenmachi

Hiroshi SASAKI

Monzenmachi means a town in front of a temple or a Shinto shrine. Tsukuba Monzenmachi is a part of the town Tsukuba, which lies about 70 km NE of Tokyo and it takes about two hours by train on Jōban Line of Japan National Railway and on private

railway line of Kanto-Tetsudo Tsukuba-sen (line). Tsukuba Monzenmachi has 252 households and population of 905 in 1980. Tsukuba Monzenmachi lies on the southern slope of Mt. Tsukuba (the highest peak, Nyotai-san: 876 m), at an altitude of about 220 m. Climbing of the Tsukuba-san (mountain) is reported already in an old regional book, Hitachi-Fudoki (713) and in an old anthology Manyōshū (759) of ancient times.

In 782, Chisokuin Chūzenji temple was built by Rev. Tokuichi at the Higashiyama (eastern part of Tsukuba) settlement. In 1632, Chisokuin Chūzenji temple was removed and renewed at the present site of Tsukuba Shrine, west of Higashiyama by the third Tokugawa shogunate, Iemitsu. He made a new steep main street (present Rokuchō-dori) in front of the temple to the south (Tsukuba-Usui), for the sake of wood and materials transport to construct the temple. Along this new steep main street, new houses of workers and people from surrounding areas were built. Out of these houses, inns, souvenir shops, brothels and so on, were appeared for the temple and mountain visitors. This was a prototype of the Tsukuba Monzenmachi (Fig. 2).

Tsukuba-san are famous since ancient times in poetry and story, especially among the people in the Kanto Plain. People around Tokyo can see Mt. Tsukuba in the east and Mt. Fuji in the west on a day of fine weather. On the 1st of February 1969, Tsukuba-san was designated to a semi-national park with the neighbouring Suigo-marsh land. There were five pilgrimage routes to reach Tsukuba-san till the dawn of the mass transportation age (Fig. 1): Fuchū-kaidō Road, Yamane-michi Road, Tsukuba Rokuchō-dōri Road, Nishi (West)-kaidō Road and Shiiomichi Road.

In 1918, the private railway line, Kanto-Tetsudo Tsukuba-sen was opened between Tsuchiura and Iwase (40.1 km) and for the first time tourists could get off at Hōjō on the Tsukuba-sen and then at Tsukuba, which is nearer to the shrine than Hōjō. In front of the Tsukuba station a great Torii (Shinto shrine gate) stands and souvenir shops line. Tourists climb the 2 km gentle slope from the Tsukuba station to the shrine. In 1923, a bus service was opened on a new road from the station to the shrine, and in front of the shrine on this new road, a new Monzenmachi was formed, instead of old Rokucho-dōri Menzenmachi, which had to decrease quickly and the same were Fuchu-, Makabe- and Shio-roads.

In 1925, a cable railway was opened from shrine to the peak, 1605 m long, 495 m in relative height. Wagons were Swiss-made and cables German-made. It was the fifth cable car in Japan, the second in Kanto district after Hakone. Thus mountain visitors increased 20 times. The cable was removed during the war, but it was restored again in 1954. In 1965, the toll drive road "Tsukuba sky line" was opened to Tsutsujiga-oka (Hill of azalea), from where a new rope-way was constructed to the Nyotai-san (woman peak). In 1974, the toll drive road "Omote Tsukuba sky line (purple line)" was opened from the east and the tourism by car is followed by car drivers. Thus, Tsutsujiga-oka is becoming the center of tourism in Tsukuba. Souvenir shops and restaurants gather nowadays at monzenmachi, summit area and Tsutsujiga-oka.

Because of mild climate of Tsukuba Monzenmachi, some retired people have come to

live here in southern slope. In 1979, the town of Tsukuba had 368 out-immigrants and 712 in-immigrants and got 344 social increase. The largest out-immigrants went to Ibaraki-ken (50.1%) and then to Tokyo-to (20.8%), Kanagawa-ken (7.2%) (Fig. 5). The largest in-immigrants came from Ibaraki-ken (51.1%) and then from Tokyo-to (24.6%) and Kanagawa-ken (5.5%).

On the plain are mostly rice fields, among which wheat and mulberry fields are just like islands on a little high plain (Fig. 3). Between the Tsukuba (up) and Usui (down) settlement on the southern slope of Mt. Tsukuba, along the old pilgrimage road Rokuchô-dôri, are planted traditional small mandarin trees and new ordinary mandarin in 6.4 ha by 46 farmers. Originally mandarin trees are introduced by Tsuneo Watanabe in 1950 from Aichi-ken, and planted for tourist sake under the mild climate of inversion of air temperature.

Fifty two percent of agricultural land owners manage the land for self-sufficiency, 21% lend the land to others, and another 21% don't manage the land, because of scarcity of labour forces and the damage by wild boars.

Hotels, souvenir shops and restaurants are located along the bus route in front of the shrine and along the alleys east and west sides of the shrine (Fig. 4). outside of these tourist industries, in Higashiyama in the east and along the Rokuchô-dôri street in the south, live shrine workers (Shinto priest, oddjobber, workers of the shrine forest), proprietors and workers of souvenir shops or restaurants. Some of them keep the shops and restaurants on the summit of Mt. Tsukuba and commute every day to the summit of Mt. Tsukuba by cable railway. Thus, Tsukuba Monzenmachi is an occupational complex focused on shrine Tsukuba with shrine workers, talisman makers, tourist industries and with non tourist occupations (salaried men, farmers, carpenters etc.). Monzenmachi is supported not only by the shops in front of the shrine, but also by the salary of the commuters to other towns.

The structure of the Tsukuba Monzenmachi consists of two parts; one in the core part with the Tsukuba Shrine and its souvenir shops, hotels and restaurants, and the other in the periphery with dwelling houses of workers in shrine and tourist industries. The peripheral dwelling houses were the core part (consist from hotels, souvenir shops, brothels) by the opening of the rail way in 1918.



写真1 筑波山全景

(1976年2月)

筑波山を南西より望んだもの。中腹 220m 付近に筑波山門前町が見え、そこから山麓へ下る市街が六丁通り。山頂から右の肩に白く見える京成ホテルと広場がつつじが丘。主峰の右側が女体山 (876m)、左側が男体山 (870m)、双峰の後方が加波山 (709m)。左下の集落が筑波駅のある沼田、その下方が桜川の沖積低地の水田。



写真2 筑波町北条に立つ道標

(1978年1月)

北条の市街東部から北へ通ずる丁字路に立っており、右側に「ここよりつくばへ」、左側に「にしおおそねいちのや江戸」と書かれている。正面に女体・男体の双峰が見えている。



写真3 筑波町南端逆川から北方

筑波山を望む (1978年1月)

水田裏作の麦が植えられ、桑畑が水田中の微高地に島畑状に点在している。門前町は比高 200m の上方に白く東西に横たわっている。山頂部は広葉樹林のため冬ははげてみえるが、中腹斜面は針葉樹の森でおおわれている。条里地割も耕地整理事業が始まって消滅しようとしている。



写真4 六丁通り南端部の鳥居
(1978年1月)

これより江戸時代の六丁通り門前町が始まる。鳥居左側の柱の左側に、石碑と並んで四角柱の芭蕉の弟子の服部嵐雪の「雪は申さずまずむらさきのつくばかな」の句碑が立っている。春秋(4月1日11月1日)の御座替祭には御輿がこの鳥居まで下りてくる。



写真5 六丁通り6丁目
(1978年1月)

かつての石段は自動車時代になって舗装された。沿道には夏柑、シュロ、照葉樹の生垣などで冬温暖な気候を示している。両側の家は下方の家との間に石垣を築いて地ごしらえしている。

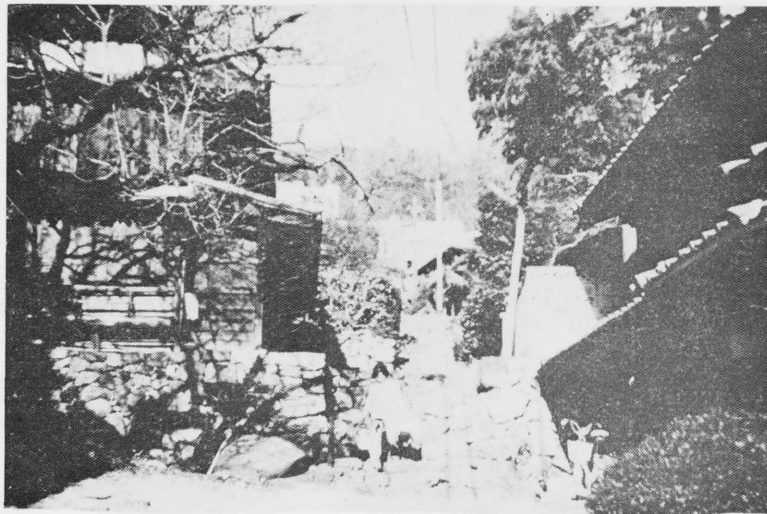


写真6 六丁通り1丁目
(1978年1月)

神社に近くなると道は急勾配になり、今日でも「六丁石段」が残っていて、江戸のおもかげを留めている。右側の家は芸者屋、当主は東京へ出ていて空家になっている。

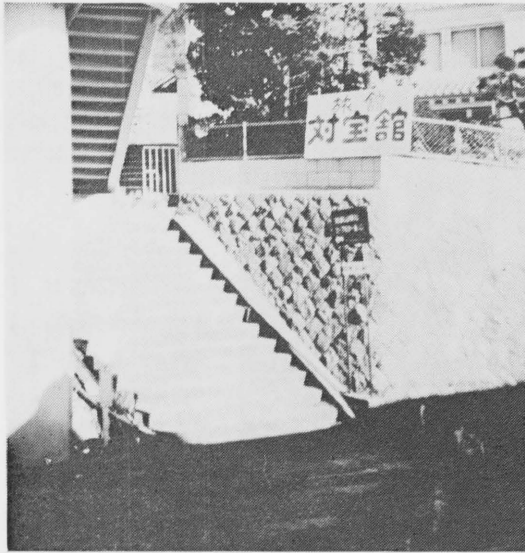


写真7 旅館大宝館

(1978年1月)

しっくい瓦をとめた屋根と白壁は、数少ない江戸時代の遊廊造りで、テング党幹部藤田小四郎の書を蔵している。当主は町外への通勤教師で、夫人が副業として旅館を営んでいる。下端は1965年開通の筑波山スカイライン。

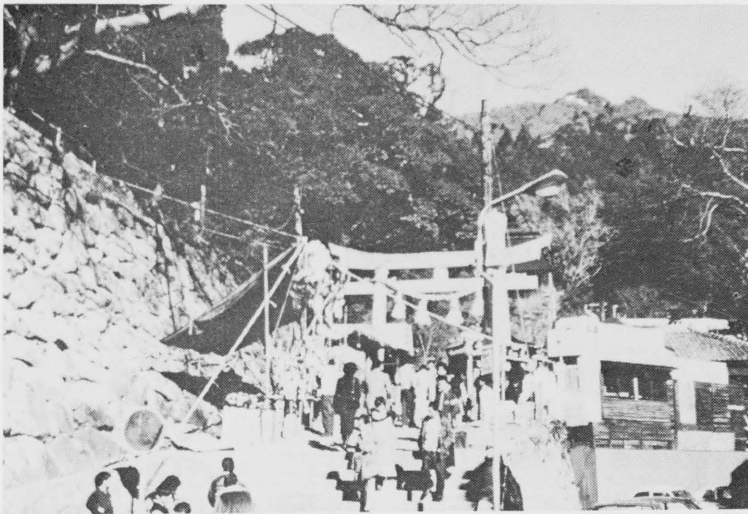


写真8 筑波神社前鳥居

(1978年1月1日)

左の石垣は昔神官邸のあったところ、右側は江戸屋旅館の駐車場。正月の露店が門前に出ている。



写真9 神橋と随神門

鳥居をくぐると切妻屋根の神橋が、その後方に随神門が現われ、いずれも三代將軍家光時代のもの。



写真10 筑波山神社拝殿

(1978年1月)

1875年(明治8)建立された山上両本社の拝殿。桁行12間、梁間8間8分。江戸期には大御堂があった。



写真11 女体山神社より男体山を望む (1978年1月)

鞍部の御幸ヶ原にはケーブルカーの山頂駅があり、駅前に山頂土産物屋群がみえる。アンテナ銀座は関東平野を望む筑波山の好位置を反映している。

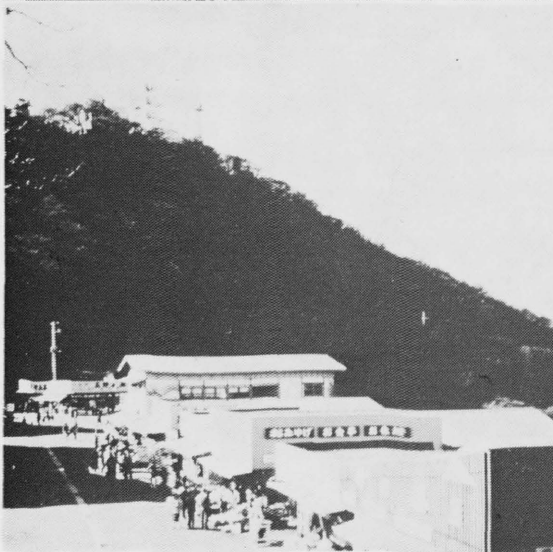


写真12 山頂門前町

(1978年1月)

手前より仲の茶屋、たかはし、夫婦茶屋、みゆき茶屋、田上売店、沼田屋売店の6軒が連らなり、少し離れて五軒茶屋、幸雲亭も見えている。背後は男体権現神社のある男体山。